

大谷光瑞のトルコでの動向 ——「仏教」と「農業」のあいだ——

三谷 真澄*

Kozui OTANI's Activities in Turkey : On Relation between Buddhism and Agriculture

Mazumi MITANI*

In 1890, the Turkish warship Ertuğrul Firkateyni was wrecked off the coast of Kushimoto, Wakayama. This led to a historical exchange in which some ordinary Japanese villagers helped the foreign survivors of the wreck. A monument including some writings of Kozui OTANI (1876-1948) was built near the site. Kozui lived through the tumultuous times of the Meiji, the Taisho and Showa periods and is considered an intellectual giant with an exceptionally wide-ranging knowledge and expertise. He was not only the 22nd head priest of Jodo-Shinshu Hongwanji-ha sect, but was an explorer, researcher, educator, businessman and building designer.

Kozui is also known as the man who dispatched the OTANI expedition. This paper focuses on Kozui's concern for agriculture in particular and includes the results of the most recent research about his business in the Turkish cities of Ankara and Bursa.

はじめに

大谷光瑞 (1876-1948) は、明治・大正・昭和の激動の時代を生きた人物であり、様々な面に通じた「知の巨人」であった。浄土真宗の開祖親鸞の流れを汲む家系に生まれ、浄土真宗本願寺派の第22世宗主(管長)もつとめたという点では、仏教者・宗教者であることは言うまでもない。しかし、日本唯一の組織的な中央アジア探検として知られる「大谷探検隊」を組織し、自らも参加したという点では探検家であった。インド、中央アジアをはじめアジア各地で収集した資料の研究調査を行い、主としてサンスクリット語やチベット語仏典の翻訳をおこなった「光寿会」を主宰したという点では研究者としての側面をもっていた。また、武庫仏教中学の創設や、いわゆる「大谷学生」の選抜育成と指導という点では教育者としての側面を、さらには、インドネシア、トルコ、台湾等での産業開発という点では、実業家としての側面をも併せ持っていたと言えるであろう。この他、思想家・学者(宗教・言語・地理・歴史・農・植物)・旅行家・著述家・随筆家・政治家・設計者(建築・都市)といった様々な顔を併せ持っていた。

この中で、本研究課題に関連するトルコとの関係においては、1925年に大谷学生・後藤智をガラタ高等学校(Imperial Lycieda Galata-Sérai フランス語による教育機関)に留学させたこと、1927年以降のアンカラでのバラ園と香水工場経営、1929年以降のブルサでの織物工場の経営が主要な

* 龍谷大学国際学部教授

ものとなる。

一方、大谷探検隊が収集した資料の中には、多種の言語・文字で記された仏典写本が多数含まれているが、トルコ・イスタンブール大学図書館には、大谷探検隊（1902-1914）と同時期に同地域を探検したドイツトルファン探検隊収集の当該資料の一部が所蔵されているという縁もある。

また、和歌山県串本に光瑞の揮毫を含む石碑が建てられている¹⁾。1890年、トルコ軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本沖で遭難し、見ず知らずの異邦の生存者を名もなき日本の市井の人々が助けるといふ、日本とトルコの歴史的交流があった。この記念碑は、1928（昭和3）年に「日土貿易協会」によっておこなわれた弔魂祭を記念して建てられたものである。現場付近にはトルコ記念館や記念碑が建てられ、光瑞によって墨書された「弔魂碑」の文字が刻まれている。これも光瑞とトルコの縁の深さを物語っている。

本稿は、2016年3月31日に刊行した報告書の内容をもととしつつ、大幅に修訂したものである。共同研究員のヤマンラール水野美奈子氏より、最近発見された新資料について概要を記していただいた。また嵩満也氏より、2014年度におこなったアンカラでの調査に基づく最新情報や研究成果をまとめていただいた。

大谷光瑞と農業

光瑞は、生涯を通じて農業を重視し、1930年当時（55歳）の光瑞は、「自ら職業を農業に撰び、其の身分を登記するや、常に農と記し²⁾」としている。その証拠に、1940年6月24日付の「蘭領東印度」、すなわちインドネシアに渡航する際のパスポートの職業欄には、「農業（英語欄 Agriculture）」と自署されている³⁾。

以下、光瑞の著作の中から、農業にかかわる言説を列挙する。記述1～5は、農を国の本（基）とするもの、記述6～8は、職業を農業とするものである。

記述1「農産は國の本なり。（中略）政府は常に農の國本なるを忘れず、国家の権力を行使し、農産を豊饒ならしめ⁴⁾」

記述2「夫れ農は國の基なり。⁵⁾」

記述3「農は國の本である。（中略）政府は、国家の権力を行使して農産を豊饒にし⁶⁾」

記述4「農は國の本なり。農興らずば人存し難し。⁷⁾」

記述5「人食なくば死す。人なくば國存せず。國の本たるや工に非ずして農に在るは疑を容れず。⁸⁾」

記述6「香料製造は私の職業で御座いますので、種々の植物を栽培して居ります⁹⁾」

記述7「不肖は、自ら職業を農業に撰び、其の身分を登記するや、常に農と記し、自ら誇りとなせり。世職業多しと雖も、農業より貴きはなし。農を首めとし、工商之に次ぐ。其の他政治、教育、宗教を職となせる輩は、皆其の下位にあり。蓋し彼等は農工商の恩澤により、生息せるものにして、農工商なくば、一日も其の生命を持続する能はざるなり。

元來職業に高下なしと雖も、假りに貴賤の別を分たば、農、工、商、貴にして、政治、教育、宗教等の寄食者は賤たるを免れざるなり。¹⁰⁾」

記述8「殊に私の職業は農業でございますから－（中略）農業者が、農業に不適当な所へ行つて

農業をやらねばならん。これ位世の中に皮肉なことはありません。私は今まで嫌だから逃げて居つたのです。満洲へ行って農業することは見込がありませんから、それで逃げを張って逃げ終せて居つたのです。それで一遍も満洲で私農業をやつたことはございません。どこで大谷やつて居つたか？ジャバでやって居る。世界中一番よいから。(中略)有難いことに世界中歩いて知って居ります。一番よい所を知つて居ります。¹¹⁾」

以上のように、農業を重視する文言は枚挙に暇がない。まさに光瑞の多面的な活動の根幹にあったのが「農業」であったことは疑いない。記述 6 は、トルコ・アンカラでのバラ園経営と香水製造を念頭に置いたものであろう。

光瑞の農業実践

光瑞は、1914 年 5 月の宗主辞任後、実際に、シンガポール、ジャワ、トルコ及び台湾で農業を主体とした「起業」を行っている。

1916 年、シンガポールのゴム園に始まり、セレベス島のコーヒー園、ジャワ島のシトロネラ園、トルコ・ブルサでの養蚕・絹織物・染織、アンカラでのバラ園・香水製造を試みている。一方、二楽荘や台湾・逍遙園でも果樹を栽培していたことはよく知られている。

宗教者（仏教者）である光瑞が、自己の職業として「農業」を重視した意義はどこにあるのだろうか。以下、光瑞のおこなった農業に関する事業をトルコ以前、トルコ、トルコ以後の順に確認し、トルコの事業の位置づけや意義について考察したい。

トルコ以前

先ず、1909（明治 42）年、38 歳の時、神戸六甲に「二楽荘」が竣工し、「二楽荘園芸部」においてマスクメロンや葡萄の温室栽培、林檎・梨・洋李・スイカなどの栽培のほか、米の生産、牛乳、乳酸も販売していた。言わば今後の農業展開において実験的や役割を果たしていたとも言える¹²⁾。この二楽荘本館は、光瑞によって設計され、伊東忠太は「本邦無二の珍建築」と呼ぶように贅を尽くした建築であったが、1914（大正 3）年、宗主辞任にともなう手放すことになり、1932 年に焼失した。

宗主辞任後、アジアを中心とした放浪の旅に出発することになるが、1916（大正 5）年、41 歳の頃シンガポールにおいて農園（旭日護謨園）を経営し、ゴム栽培をおこない、1917（大正 6）年まで継続されたようである¹³⁾。

続いて、1917（大正 6）年 2 月中旬以後に「蘭領印度農林工業株式会社」をジャワ島スラバヤ市に設立し、セレベス島メナドで大森林の開拓に着手、その後中止し、主力をジャワに移して農園経営をおこなった。1918（大正 7）年 4 月、セレベス島メナド附近にて英人より伽琲（コーヒー）園（耕雲山荘）を購入し経営することになった（1920（大正 9）年まで）。

同年 7 月、ジャワ島ソラバイヤ附近にてシトロネラ園を購入（ジュランゼロ農園）、ジャワ西部にスカハジ農園（シトロネラ栽培）（環翠山荘）、パノラマ農園（養蚕）（大観荘）を経営した。これらの事業は日華事変前まで継続したようである¹⁴⁾。

1928（昭和 3）年 6 月 24 日、バンドン市でオランダ政府の要請により農園の蚕糸等を陳列（7 月

8日まで)した。『鏡如上人年譜』によれば、

今年の農園の成績は、環翠・大観両荘は昨年と大差なく、若干進歩あり、環翠荘のバラは発育不良菊も不良、大観荘は良好、ポコステンモンパチュリは極めて良好、大観荘の桑苗は優良、園蔬は両園とも佳、爪哇における農園経営も十余年の歳月を重ね、地積一千ヘクタール、従業員三十名を数ふ、環翠・大観両荘は彼等に任せ、更に市外に悠然荘を新築す。¹⁵⁾

トルコと農業（1927-1933）

光瑞は、計4回のトルコ訪問をおこなっている。第1回は、1901年6月で、滞在中のロンドンから短期間イスタンブルを訪問したものである。第2回は、1926年4月～5月で、第3回が同年11月、そして第4回が1928年12月～1929年2月であった。

農業に対する関心からの訪問は、1926年以降であり、インドネシアからトルコでの「養蚕」事業へと対象が移っていたようである。

ブルサ附近を視察せんが為、五月七日午前九時コンスタンチノーブルを發す。(中略)ブルサの港はムダニアと名く、(中略)ムダニアの沿岸は丘陵海に逼り、平地少なし。山坡は概ねオリーブと桑樹なり。桑樹は極めて風土に適し、最も繁茂せり。往時ギリシヤ人の居住せし時は、盛んに養蚕をなせり。今は往時の如く盛んならず。(中略)

ブルサの平原は地味極めて膏沃にして、アダナ平原に次げり。桑園極めて多し。アナトリア第1の養蚕地とす。附近一帯に樹木多し。水淨く、山青く、アナトリア大平原の荒蕪に比し頗る遊子の目を慰む。ブルサの西に比連して、チクルゲの小村あり。温泉湧出し浴場あり。この温泉は頗る有名にして、浴客遠くコンスタンチノーブルより来る。設備もまた完全なり。(中略)

ブルサの富は蚕糸業にあり。トルコ政府は蚕業学校を設け、鋭意奨励せり。翌日地方農務局長を訪ふ。(中略)

午後農学校を視察(中略)農学校を辞し、蚕業学校に至る。(中略)桑樹は概ね大葉にして、皆喬木に近く、高刈なり。(中略)概して、アナトリアの養蚕は数百年の事業にして、決して近時の事に非らず。桑樹も亦その源流明かならざるべし。

翌日農務局長の案内により七十キロメートルの西方、ムハリヂの村の附近に於ける官有の種畜場を見る。(中略)午後三時辞して帰途に就く。(中略)翌日午前七時半、再び汽車にてムダニアに向ひ、(中略)午後四時コンスタンチノーブルに帰れり。五月十三日午前十時(中略)コンスタンチノーブルを去る。¹⁶⁾

以上のように、桑樹の生育に適し、歴史的に養蚕事業が盛んである「ブルサ」の地での企業に向けて、現地視察をおこなっていたことが分かる。

また、1928年の記事によると、1929年よりトルコでの起業が実行されようとしていたことがうかがわれる。

不肖の蚕業投資は大規模に、トルコ共和国の領土に於て明年度より実行に着手せんとす。地中海岸は世界第一の蚕業適当の地なり。広大なる美田は開て海岸に列なれり。殆んど何等の危険だもなく起業をなし得べし。到底ジャバ蚕業の如き未試験の比にあらざるなり。¹⁷⁾

光瑞は、それに先立ちアンゴラ（アンカラ）でバラの栽培と香水製造をおこなっている¹⁸⁾。

薔薇は美なりと雖も、未だ牡丹の濃艶に及ばず。その清香に至ては、菊蓮を圧し、花中第一の称あり。就中ロザセンチフォリア、ロザダマスセナの如きは、有名なる香水を生ず。甲は多く、仏国カンヌの付近グラスに於て栽培し、乙はバツカン山の付近に栽培せり。¹⁹⁾

また、1928年のスイスからの「第五信（十月七日 ロザンに於て）」として、

精製ベンゼン（中略）ベンゼン抽出法によるを以て抽出量を増加し工費を減少せり。而してベンゼンの放散は極めて微量にして論ずるに足らず。此れにより始めて完全に花香を抽出するを得。（中略）薔薇と橙香は蒸気抽出を用うと雖も、蒸気の高温なるを以て、動もすれば、佳香を損ず。ベンゼン法を用うれば、低温なるを以て決して佳香を損ぜず。ジャバ、スカハジの工場は葉香、根香を抽出するを以て蒸気抽出をなすと雖も、将来花香を抽出せんと欲せば、必ずベンゼン法によらざるべからず。トルコの香料工場は明年度より香料抽出をなさんとす。故に盡くベンゼン法による事に決し、その機械をミツセル氏に依頼せり。同氏はトルコの薔薇は優良なりと云へり。²⁰⁾

このように、バラからの香料抽出法として様々な方法がある中で、「ベンゼン抽出法」が「抽出量を増加し工費を減少」させる、つまり費用対効果の高い方法であることを指摘している。湯水の如く浪費し、無計画に起業したのではなく、十分に採算の取れるように、適地適作を進め、歴史的な地場産業を活かしつつ、科学的方法を活用しながら、産業として成り立たせようとしていたことがうかがわれる。

側近であった仁本正恵によれば、「大正十五年二月に、上人は農場視察のため渡欧の途につき、アンゴラ地区からトルコ各地を巡遊中、年の暮れに聖上御不例の報をきいて帰国の途につかれた。²¹⁾」とされており、1926年の暮れに、「聖上」つまり天皇の病気を機に帰国となったことが知られる。同年12月25日、天皇崩御によって大正から昭和へと年号が変わる中で、トルコの事業については、「昭和三年から四年にかけて、上人は農場視察のため、欧州から中近東の旅をつづけられた。しかし、国際情勢も漸く緊迫し、これがこの方面における最後の旅であった。²²⁾」とされている。1929年以降、国内情勢や国際情勢によって渡航あるいは経営の縮小を余儀なくされたことがうかがわれる。

以上挙げたトルコの二つの事業については、1921年に上海策進書院に入学した大谷学生の上村辰巳が派遣され、光瑞の意志を引き継ぎ重要な役割を果たしている²³⁾。

なお、アンカラの事業は「薬品香料化学産業株式会社²⁴⁾」（外務省外交史料レファレンスコード B 09041286500）として、ブルサの事業は「日土織物会社」（同 B 09041433200）、「日土合弁絹織物

会社²⁵⁾」(同 B 09041411500)として、現地で会社を設立し、正式に契約を結んだ上で、事業を展開したことが知られている。後者は、光瑞、上村辰巳、メフメド・メムドゥフ・ベイ、フセインの4名の合併会社となっている。

トルコ以後

トルコ以後の農業は、台湾が中心となる。1935年(昭和10)年2月21日、60歳の時、台北を出発し、南部方面及び東海岸全島の視察へ(これより先、産業視察のため渡台、爾来台北市各方面を視察)、同年3月2日に、板橋無線電信局及び植物園を視察、7日には中央研究所農業部、台北帝大農学部等に赴く。

1940(昭和15)年11月1日、台湾の農業事業の拠点となった「逍遙園」が開園した。逍遙園は高雄に新築した邸宅で、附属園は一万坪に余り、ゴム・コーヒ・マンゴー・アボカド・サボジラ・バナナ・荔枝、柑橘等の試験栽培を今春来開始しつゝあった²⁶⁾。

光瑞は1939-1940年刊行の『大谷光瑞興亜計画』第6～第9巻に収載された「熱帯農業」(1942年に『熱帯農業』として合冊刊行)では、気候、土壌、農作物、林業、畜産、農林産加工、観賞植物に至るまで広義の「農業」について網羅的に取り上げている。「植物学名索引」も付され、ラテン語の学名が記載されている²⁷⁾。

このような農学者・光瑞の熱帯農業の実践の場が台湾であった。柴田幹夫によれば、「熱帯農業」に関心を示し、「茶園」「果実園」「缶詰工場」「蔬菜園」などを自ら経営した。とくにバナナは、長崎に送り、そこから上海に輸出するように光瑞自ら手はずを整えた。」とされ、バナナは、台湾産物中第一であるとし、15万トン以上生産し、80%は輸出しているという²⁸⁾。大谷学生もその事業の役割を担ったことが知られている²⁹⁾。

光瑞は、最晩年になっても、農業への関心は衰えることなく、1948(昭和23)年、73歳の夏頃、香川県よりオリーブの苗を取寄せ、国東半島に移植したという³⁰⁾。また、二楽荘時代に試みた乳酸菌への関心もうかがわれ、乳酸菌を活用した製品を「スティルヤング」と名付け、別府鉄輪の寿光製菓や大連の大谷光瑞農芸化学研究所などがかわったようである。

「仏教」と「農業」のあいだ

以上、確認したように、宗主辞任後の光瑞は、自己の職業として、矜持を持って農業と向き合っていた。このような仏教者・光瑞と農学者(農事者)・光瑞のあいだをつなぐのはいかなる思想なのであろうか。光瑞自身の著述からは、直接の表現を見ることは困難である。しかし、四姓(バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラ)の一つ、王族階級の「クシャトリア」が「田主」と称される意義について、以下のような記述がある。

今阿含経により是れを記さば、上古の世に天人の地上に降れるあり。遊戲歌舞して日の尽るを知らず。遂に空腹を感じ艸実を採り是れを食ふ。而して楽しみに飽き遊びに倦み上天に帰らんと欲するも肥軀復前日の輕舞に適せず。況や騰空風を御すをや。此時悔も及ばず。遂に地居し依前艸実を食とせり。後子孫漸く繁く艸実増々乏し。遂にこの艸実を栽培しその食用に充つ。而して猾智と遊惰の徒は自から栽る所なく人の栽ゆる物を欺き之を奪ふ。為に紛争絶ゆる

の期なし。

而してその住民の一部はこの煩を厭ひ遠く山林に隠れ他方に去りその大半は紛争を止めんが為相諮り最も聡明多智の人を選びて裁判の任に当らしめ以て盜奪の行ひを禁ず。是れを名けて田主と号す（田主の梵名は Kṣatreyā と云ふ。³¹⁾

これは、仏教の古典籍である阿含經典によって農業との関係を示している。この根拠となっている仏典は、おそらく『増一阿含經』と考えられる³²⁾。

また、以下のような記述もある。

布施の上策は産業増進にあり。慈善の至れるものは、国富の増加にあり。人の饑餓を救ふの仁者は、必ずしも不可ならずと雖も、人を饑餓せしめざるの智者に劣れり。大仁とは必ず大智を伴ふ。六度の最高は智度なり。智を伴はざれば仁も亦誤あり。布施も亦非あり。今日の社会救済を云々せるの輩は、皆小仁なり³³⁾。

つまり、大乘仏教の担い手である菩薩の実践徳目「六度（波羅蜜）」の中の「布施」の上策が「国富の増加」「産業増進」であるとしているのである。

最近、高本康子は、

光瑞の活動に関する疑問を解くカギは、まさしくこの、彼が主体的に、自ら「菩薩行」を實踐していたことにありと、筆者は考える。産業開発を含む彼のすべての活動は、菩薩の「行」、菩薩の宗教的実践の一つであったと読み解けないか、そのように考えるのである。³⁴⁾

と、光瑞の諸事業と「菩薩行」との関係が示唆された。光瑞にとって、国を富ましめる農業は、大乘仏教の担い手である「菩薩」の布施の最大のものであるという自覚のもとに行われていたのだろう。

光瑞は、以下のようにも述べる。

仏教には布施といふ言葉がある。六度中の一度で仏教の中でも貴い行為とされてゐる。（中略）布施の最大なものは、国を富ますことである。（中略）国法を正し、国民の知識を増進し、国富を増して国民をその業に安んぜしめるのが一番大きな布施で、これを善政といふのだ。寄付や義捐は布施の最下等である。

人の餓ゑたのを見て救ふのは仁者であるが、初めから人を餓ゑさせないのが智者である。従つて、大仁は必ず大智を伴はなければ、ウソである。六度の最高は智度で、智を伴はない仁は、仁でない。

今日、慈善といひ、社会救済といふのは、みな小仁である。悪いとはいはぬが、範囲もまた小仁小智を出でない。

産業によって国富の増進をはからなければ、決して社会救済の実はあがるものではないのだ。私は不仁者と呼ばれてもかまはぬから、産業の増進に努力しようと思ふ。³⁵⁾

農業振興は「布施」の最大のものであり、衆生救済を目指す「慈悲」の発露でもあったのである。農業は一般的な意味での事業や経営ではなく、国を富ましめ民を済うという意味の活動であったのである。土農工商を持ち出すまでもなく、日本では農業は重要な産業であった。国土面積の狭さから、その振興には科学技術をもってする必要がある、適地適作を基本としつつ、日常生活と直結する食料問題の解決こそが国の喫緊の課題なのである。

光瑞は、日本は、工業立国ではなく「農業立国」をめざすべきであると考え、率先して科学的手法を取り入れていった。光瑞は、明確に「仏教は科学」ととらえていた。

仏教は科学なり。科学とは仏教の純理論を云ふ。是を智慧と云ふ。智慧とは空を知るを云ひ、空とは万物尽く変化状態に在るを云ふ。是れ哲学の云ふ所に非らず、宗教の談ずる所に非ず、唯科学によりて始めて知るを得べし。仏教には智慧門あり、慈悲門あり、方便門あり、慈悲と方便の両門は哲学宗教に属すと雖も、智慧門は純然たる科学ならざるべからず。科学とは万物の理を究むるものにして、真理は一ありて二なし。

仏教はその理論を分つて二とし、一を第一義諦と云ひ、二を世諦と云ふ。第一義諦とは原語を paramārtha と云ひ、最高の道理の義なり。世諦とは saṃvṛtisatya と云ひ、近接の道理の義にして、最高に到達すべき中間を云ふ。第一義諦を実相と云ひ、世諦を仮相と云ふ。³⁶⁾

また、「第一義諦は純然たる科学なり³⁷⁾」という表現もあり、上山大峻によっても、「光瑞は、科学が極める窮極の真理と仏教という第一義諦とが同一であるという。」と指摘されている³⁸⁾。

一方で、

元来科学は最も高等なる学にして、第一義諦を仮りに言語を以て説かんとせば科学に依らざるべからず。即ち第一義諦より下つて世諦に入らんとする所を研究するは科学にして、哲学宗教の如き虚妄人心を基礎としたると相對せざるべからざるが如き程度に非らず。是に依り精神の安慰を得ざるは畢竟、自己の浅学なるによる。³⁹⁾

とも表現されている。仏教の究極的真理＝第一義諦を言葉で表現するとすれば、「科学」であろうし、また、第一義諦を説く言語表現として「科学」が重視されているのである。つまり、光瑞の「科学」は第一義諦そのものと第一義諦に至る言語表現との二重の意味をもつこととなる⁴⁰⁾。

仏教の布施や慈悲の精神（それは大乘の菩薩の精神と呼んでも良い）を媒介として、仏教的真理（第一義諦：真諦）と、世間世俗がつながり、国を富ます具体的事業として農業が位置づけられ、その増産の手法として科学的手法が用いられる必要があるのである。

仏教→布施＝富国→農業

仏教と農業の「あいだ」にあるのは、布施や慈悲といった仏教的徳目であり、機械や化学といった科学的手法である。いずれにしても、仏教と農業は切り離して考えるべきものではなく、ものの本当のあり方を知見する智慧から、衆生救済へと転換する慈悲の具体的・社会的展開こそ「農業」であったのではあるまいか⁴¹⁾。

1917年の講演では、以下のように、仏教が「応用」できることを説いている。

而して仏教の真理は宗教以外に應用されるか、否かと申せば、私は應用されると断言します。今日迄、各宗の高僧達は、これを主として宗教の方面、或は哲学の方面には應用されたが、それ以外のものに應用することを務めて居りません。けれども私は應用されるもの、否、應用すべきものと断言致します。⁴²⁾

仏教は世間的・社会的に「応用」できるものである。まさにそれを一生を通じて具象化しようとしたのが光瑞ではなかったであろうか。

具体的な方法として、1920年には、以下のように述べている。

今農産貴からんか、他の物低廉ならんと欲するも得べからず。農産をして低廉ならしむるは、天然の利用を更に増大せしむるにあり。同一の地にして、其産を倍せば、即ち其価を半ならしむるに同じ。之れを行ふの術二あり。一は機械を用ふるにあり、二には化学を研究するにあり。耕耘の具は、千年以来これを究めざるなし。然れども猶力微にして、今日の農法に適せず。⁴³⁾

つまり、農業生産を増大させる方策として、「機械の利用」と「化学の研究及び応用⁴⁴⁾」という二つの方法を指摘している。特に肥料など、経済的に農業生産を増大させるという意味で、化学研究に価値を見出している点は、非常に科学的・合理的な考え方であり、そこに、農学者や理学者、化学者の存在意義があるということなのである。その上で、気候や土壌にふさわしい農作物を育成することで自給自足可能な国作りを実現していこうとするものである。

おわりに

徳富蘇峰は以下のように光瑞の生涯を要約している。

彼が一貫したる七十三年間の生涯は、これを要約すれば、二個の目的を果たさんが為に捧げ尽くしたと云ふ可きである。

第一の目的は、世界宗教中の最も廣大無辺にして、深奥妙理ある仏教を振興し、之を以て精神的に東亜民族の興隆を促すことである。第二は東亜の凡有る資源を開拓し、東亜民族の生活を向上せしめ、東亜をして自給自足、現在の植民地の状態を一掃し、以って東亜の隆昌をはかることである。⁴⁵⁾

すなわち、仏教振興による民族興隆と資源開拓による生活向上を光瑞は目的としていたと評されている。日本を含む東アジアの発展において、精神的な面を仏教が担い、物質的な面を農業が担っていたということであろう。

本稿でテーマに掲げた「仏教」と「農業」、この二つの言葉の並置をいささか奇異に感じられるかも知れない。しかし、光瑞には何らの違和感もミスマッチもなく、統合されていたように見え

る。つまり仏教と農業の「あいだ」には、何の懸隔も障害もなく、光瑞の中ではスムーズにつながっていたと考えることができるのではあるまいか。

先に、光瑞が実際に使用したパスポートの職業欄に「農業」と自筆で記載されていたことを述べた。日本有数の巨大仏教教団である浄土真宗本願寺派の宗主もつとめ、数々の役職を歴任した光瑞が、僧侶でなく、研究者でも著作家でもなく、矜持を持って「農業」と記載しているのである。自身の研究（植物・植生・地理・気象など）とその科学的応用がそのまま「食」につながるという意味で、研究のための研究ではなく、まさに実生活に直結する「実学」であり「実業」であったのである⁴⁶⁾。

本研究課題の実施に先立つ 2008 年 3 月、ヤマンラール水野美奈子先生のご教導のもと、上山大峻先生、鈴木董先生、ジラルデッリ青木美由紀先生らとともに初めて訪れたブルサで、共同経営者の子孫であるギョクチェン家当主らと面談できたことは、予期せぬ偶然の出来事であった。その希有の出遇いが 2010 年の特別展に結実し、トルコ軍艦・エルトゥールル号が難破し、日本との友好の記念日とも言える 2010 年 9 月 16 日にブルサにおいて国際シンポジウムが開催された。

そして 2014 年夏、国際社会文化研究所の研究資金を得て、これまでほとんど知られていなかったアンカラのパラ園調査をおこなった。そこでお世話になった多くの人びとの歓迎の言葉の中に、トルコと日本の友好関係がいかに長く深いかを思い知らされた。

本研究課題最終年であった 2015 年には、イスタンブル市内でテロ事件が起こるなどトルコの政情不安のため出張ができず、フィールドワークにもとづく学術情報を得ることができなかった。そのことは非常に残念であったが、年度末にはブルサでの動向にかかわる史料などの研究資料編を含む研究成果報告書を刊行することができた⁴⁷⁾。

また同年は、1890 年のエルトゥールル号の海難事故から 125 年となり、「海難 1890」という両国合作の映画も公開された。本研究課題でめざした大谷光瑞のトルコでの動向調査も緒に就いたばかりで、今後も両国の良好な関係が末長く続き、研究調査が進展することを願ってやまない。

注

- 1) この記念碑には、「昭和四年四月五日 篆額 大谷光瑞書 正六位勲三等 稲畑勝太郎撰」と刻されている。光瑞の篆額部分は「弔魂碑 光瑞書」とある。
- 2) 『大谷光瑞全集』第七巻「處世編」[国民之自覚] p.533 (初出:『大乘』IX-2-4, 1930 年)。
- 3) このパスポートは、2007 年 7 月 14 日、筆者が青森市内の浄土真宗本願寺派寺院・光行寺を訪問し、光瑞の側近であった仁本正恵(熙)氏の遺品中から発見したものである。2010 年「トルコにおける日本年」にあたり、ブルサ市内で「ブルサにおける最初のトルコ・日本産業提携:ギョクチェン家と大谷光瑞」展(2010. 9. 16-12. 29)が開催され、光行寺様のご好意により実物が展示された。また、同年イスタンブル市内で「新月と日の丸:山田寅次郎・伊藤忠太・大谷光瑞イスタンブルにいた三人の日本人」展でも複製が展示され、Esenbel, Selcuk & Kucukyalcin, Erdal & Miyuki Girardelli "Hilal ve Güneş: İstanbul'da Üç Japon - Yamada Torajirō, Itō Chūta, Ōtani Kōzui", Istanbul Research Institute, 2010 に掲載された。
- 4) 『大谷光瑞全集』第七巻「處世篇」[無題録四五二] p.452 (初出:『大乘』1930 年)。
- 5) 同 [国民之自覚] p.520 (初出:『大乘』IX-2~4, 1930 年 2 月)。
- 6) 大谷光瑞『光瑞縦横談』実業之日本社, 1936, p.167 (初出:『読売新聞』1936 年 1 月 1 日から 3 月 27 日までの連載)。
- 7) 『大谷光瑞興亜計畫』第六巻「熱帯農業」【一】第一章 総論 一、農は国の本なり 農業の目的 p.1 「昭和十五年三月十三日上海ニ於テ」の自序あり (初出:『大乘』XIX-8, 1940 年)。
- 8) 『大谷光瑞興亜計畫』第六巻「熱帯農業」「工業立國を駁す」p.5 (初出:『大乘』XIX-8, 1940 年)。

- 9)『大谷光瑞全集』第六卷「教義編」p.524（大正十四年三月六日上海日本人倶楽部での講演にて）、1935年刊、1925年。
- 10)『大谷光瑞全集』第七卷「處世編」[国民之自覚] pp.533-534（初出：『大乘』IX-2-4, 1930年）。
- 11)『大谷光瑞全集』第十二卷「隨筆編」pp.497-498 京都時事所感（昭和八年四月五日午前十時—十二時 京都女子専門學校に於ける京都光瑞會講演（初出：『大乘』XII-10, 1933年）。
- 12) 芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考—二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館、1999「園芸部の活動」pp.118-122。
 芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考—二楽荘と大谷探検隊Ⅱ』芦屋市立美術博物館、2003「二楽荘内の事業—園芸—」pp.78-91。
- 13) 加藤斗規「大谷光瑞と南洋」『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、2010、pp.249-250。
- 14)『鏡如上人年譜』によれば、その後、光瑞は何度かジャワ島を訪れている。1940（昭和15）年（65歳）7月—8月末に神戸発ジャワに赴く（スラバヤ、バンドン、ガル—近郊チヌルパン農場、バタビヤ等へ）。
- 15) 鏡如上人七回忌法要事務所編輯『鏡如上人年譜』鏡如上人回忌法要事務所、1954、p.98。
- 16)『大谷光瑞全集』第9巻「地中海遊記」（七）（五月十四日 コリント湾にて）pp.498-499。
- 17)『大谷光瑞全集』第9巻「鵬遊記」p.396。
- 18) 参考として、エルダル・キュチュッキュアルチュン氏の分析を以下に掲げる。
 「一九二七年三月二十八日に在トルコ日本大使から外務省宛に送られた報告書」
 大統領ケマルパシャと大谷光瑞氏の間に大統領のアンカラの近くにある「アヒマスッド農園」で共同経営する契約が交わされた。
 1. この契約が一九二七年（昭和二年）二月二十二日にアンカラにて調印された。
 2. 契約書に大統領、大谷光瑞そしてトルコのイッシ銀行のそれぞれの代理人がサインをした。
 3. 農園事業の資本の五万—〇〇〇リラを大統領ケマルパシャ、そして五万リラを大谷光瑞氏が払うことになった。
 4. 大谷光瑞氏は三月十七日に二万五〇〇〇リラをイッシ銀行に振込み、残額を四月中に上海から送金する。
 5. この事業が雇う人の内八人は日本人で残りはトルコ人になる。
 エルダル・カ・ヤルチュン「大谷光瑞とトルコ—建国の父ケマルパシャのパートナーとしての大谷光瑞」『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、2010、pp.291-292 参照。
- 19)『大谷光瑞全集』第8巻「(六) 花」（大正四年七月二十三日 普陀山に於て）p.172。
- 20)『大谷光瑞全集』第9巻「鵬遊記」pp.406-407。
- 21) 仁本正恵『本願寺の明星 大谷光瑞上人の生涯』神戸別院慶讃法要事務所、1973、p.72。
- 22) ibid. p.72。
- 23) 小出亨一「大谷学生と瑞門会」（柴田幹夫『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、p.467。
- 24) この他、農林工業会社、アンゴラ農工株式会社の名称がある。ヤマンラール水野美奈子「大谷光瑞の新生トルコ共和国における二つの殖産事業」（三谷真澄・ヤマンラール水野美奈子編『大谷光瑞のトルコでの動向—「仏教」と「農業」のあいだ』（龍谷大学国際社会文化研究所研究成果報告書）龍谷大学国際社会文化研究所、2016）p.7 参照。
- 25) 日本語・トルコ語名とも数種あることが知られている。ヤマンラール水野美奈子前掲論文 p.5 参照。
- 26)『鏡如上人年譜』p.122。
- 27) 目次や内容の詳細については、拙稿「仏教と農業のあいだ—大谷光瑞師の台湾での農業事業を中心として」（柴田幹夫編『アジア遊学』222号「台湾の日本仏教 布教・交流・近代化」勉誠出版、2018）pp.214-215を参照。
- 28) 柴田幹夫[2014] pp.129-130。（『台湾日日新報』1936年11月16日付）
- 29) 小出亨一「大谷学生と瑞門会」（柴田幹夫『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、2010、p.463に岩佐博男氏の述懐が記されている。
- 30)『鏡如上人年譜』p.129。
- 31)『大谷光瑞興亜計画』「熱帯農業【一】」総論、農は国の本なり、農業の目的、pp.1-5。

- 32) 『増壹阿含經』 卷第三十四 T 02_0125_0737 a 05-c 04 の記述が最も類似した内容・構成をもつが、一言一句一致するわけではない。光瑞の取意引用であろう。
- 33) 大谷光瑞『無題録』大乘社、1932、p.352。
- 34) 高本康子「文明を目指した「菩薩」-大谷光瑞に関する一試論」『印度学宗教学会論集』43号、2016、p.212。
- 35) 大谷光瑞『光瑞縦横談』実業之日本社、1936、pp.225-227。
- 36) 大谷光瑞全集 第六卷「仏教の応用-仏教は科学なり」pp.509-510。
- 37) 大谷光瑞『見真大師』大乘社、1923、pp.46-47。
- 38) 上山大峻「大谷光瑞師の仏教観」『東洋史苑』第50・51合併号（大谷光瑞師五十回忌記念号）1998、p.36。
- 39) 大谷光瑞『見真大師』大乘社、1923、p.22。
- 40) 本願寺宗派内では、1886年制定の「宗制」において、「真俗二諦」を、真諦：「仏号を聞信し、大悲を念報する」、俗諦：「人道を履行し、王法を遵守する」という論理が明確にされた。仏法と王法を「二つの真理」として同置して、国のあり方に一定の価値を認めていった。しかし、光瑞は、宗主としての言明は別として、一般に対してはそのような解釈をとらなかった。少なくとも宗主辞任後は「農業」を科学的に進めていくことに尽力している。
- 41) 1954年の光瑞七回忌の時、その思い出を語る座談会を掲載した『築地本願寺新報』によると、光瑞は以下のように語ったとされる。「農は国の中核である。農なき国は亡びて行く。（中略）物的幸福の中心は食物である。したがって農を盛んにするものこそ真の政治家であり、真の科学者である。法主を辞任した自分には筋肉労働はできないが、頭の百姓として従来ともこの道の研究に尽くしてきた」（『築地本願寺新報』昭和29年十月一日付）高野静子『蘇峰とその時代-よせられた書簡から』中央公論社、1988初版 p.348。
- 42) 『大谷光瑞全集』第一巻 pp.473-474。
- 43) 大谷光瑞『大勢逆行論』民友社、1920、pp.17-18。
- 44) Ibid. p.23。
- 45) 大谷光瑞猊下記念会編『大谷光瑞師の生涯』（伝記叢書149）、大空社、1994「第十一章 大谷光瑞の二大目的」pp.102-103。
- 46) 徳富蘇峰は、光瑞の「学問に対する態度」について、「彼が学問に対する態度を説明する為に、一例を挙げれば、彼が台湾拓植の計画を定めんとするや、彼は凡有る台湾に於ける文献を調査し、凡有る台湾に於ける地理を調査し、台湾に於ける植物・鉱物等地上地下の一切の資源に就て研究し、而して後此処に始めて拓植問題と取組むこととなる。故に彼の結論には、或は賛成し、或は反対する者があるとしても、彼の意見は決して空中楼阁でなく、悉く実際より練り上げ来りたるものであつて、彼は本来学者であるが空学者でもなければ、虚学者でもない、彼は実学者である。此の点は彼の本職とする、仏教そのものに就ても亦同様である。彼がサンスクリット語と取り組んだのも、亦これが為であつた。」大谷光瑞猊下記念会編『大谷光瑞師の生涯』（伝記叢書149）、大空社、1994、pp.119-120。
- 47) 三谷真澄・ヤマンラール水野美奈子編『大谷光瑞のトルコでの動向-「仏教」と「農業」のあいだ』（龍谷大学国際社会文化研究所研究成果報告書）龍谷大学国際社会文化研究所、2016。

参考文献

- 芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考-二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館、1999（「園芸部の活動」pp.118-122）
- 芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考-二楽荘と大谷探検隊Ⅱ』芦屋市立美術博物館、2003（「二楽荘内の事業-園芸-」pp.78-91）
- エルダル・カ・ヤルチュン「大谷光瑞とトルコ-建国の父ケマルパシャのパートナーとしての大谷光瑞」『大谷光瑞とアジア-知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、pp.270-314、2010
- 大谷光瑞「熱帯農業」『大乘』IV-11、12、V-1、2（1925-1926）
- 大谷光瑞『花』大乘社、1931
- 大谷光瑞『大谷光瑞全集』（全13巻）大乘社、1934-1935（特に第8、9巻）
- 大谷光瑞『大谷光瑞興亜計畫』（全10巻）大乘社、1939-1940（「熱帯農業」第6〜9巻）
- 大谷光瑞『熱帯農業』大乘社、1942（上記第6〜9巻の合冊本）

- 大谷光瑞・薄井恭一『食文化シリーズ』春秋社, 1983
- 大谷光瑞殿下記念会編『大谷光瑞師の生涯』(伝記叢書 149), 大空社, 1994
- 岡西為人『大谷光瑞師著作総覧』瑞門会, 三五書院, 1964
- 片山章雄編『予會々英國倫敦に在り 本願寺留学生・欧亜往還西本願寺留学生・大谷探検隊の 100 年』大谷記念館, 2004
- 加藤斗規「大谷光瑞と南洋」『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡』(柴田幹夫編), 勉誠出版, pp.248-269, 2010
- 鏡如上人七回忌法要事務所編輯『鏡如上人年譜』鏡如上人回忌法要事務所, 1954
- 小出亨一「大谷学生と瑞門会」(柴田幹夫『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡』(柴田幹夫編), 勉誠出版, pp.447-476, 2010
- 柴田幹夫編『大谷光瑞の研究ーアジア広域における諸活動』勉誠出版, 2010
- 柴田幹夫編『アジア遊学』222号「台湾の日本仏教 布教・交流・近代化」勉誠出版, 2018
- 白須淨眞『大谷探検隊とその時代』(museo 12), 勉誠出版, 2002
- 白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会ーチベット・探検隊・辛亥革命』勉誠出版, 2011
- 白須淨眞『大谷探検隊研究の新たな地平ーアジア広域調査活動と外務省外交記録』勉誠出版, 2012
- 白須淨眞編『大谷光瑞とスヴェン・ヘディンー内陸アジア探検と国際政治社会』勉誠出版, 2014
- 瑞門会『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』瑞門会, 1978
- 大乘社『大乘』1922-1943 (22 巻 12 号, 通巻 264 巻で終巻)
- 仁本正恵『本願寺の明星ー大谷光瑞上人の生涯』神戸別院慶讃法要事務所, 1973
- 廣瀬覺『大谷光瑞と現代日本』文芸社, 2001
- 三谷真澄・ヤマンラール水野美奈子編『大谷光瑞のトルコでの動向ー「仏教」と「農業」のあいだ』(龍谷大学国際社会文化研究所研究成果報告書) 龍谷大学国際社会文化研究所, 2016
- 三谷真澄編『「世界」へのまなざしー最古の世界地図から南方熊楠・大谷光瑞へ』法蔵館, 2017
- 三谷真澄「仏教と農業のあいだー大谷光瑞師の台湾での農業事業を中心として」柴田幹夫編『アジア遊学』222号「台湾の日本仏教 布教・交流・近代化」勉誠出版, pp.212-223, 2018
- 龍谷大学東洋史研究室編『東洋史苑・大谷光瑞 50 回忌記念号』(50/51 合併号), 1998
- 龍谷大学龍谷ミュージアム・読売新聞社編『仏教の来た道ーシルクロード探検の旅』(三谷真澄: 第 4 章扉解説・作品番号 103, 124, 128, 140, 141 解説, 「大谷探検隊将来の仏教写本ー最新の研究成果」(pp.190-199) 執筆) 2012
- 龍谷大学龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞編『チベットの仏教世界ーもうひとつの大谷探検隊』(三谷真澄「青木文教と多田等観の将来資料」pp.163-171 執筆) 2014
- ヤマンラール水野美奈子「トルコのギョクチェン家所蔵の七宝花瓶に関して」『国際社会文化研究所紀要』第 15 号, 龍谷大学国際社会文化研究所, pp.165-171, 2013
- ヤマンラール水野美奈子・長場紘・村松伸・パオロジラルデッリ・ジラルデッリ青木美由紀・永田雄三・佐野東生・嵩満也・三谷真澄・鈴木董「世界の中の日本・日本の中の世界 (2007-2009 年)ーイスタンブール旧総領事館と日本の文明開化思潮」『国際社会文化研究所紀要』16 号, 龍谷大学国際社会文化研究所, pp.9-59 (三谷真澄「西域文書が結ぶ日本とトルコ」(pp.35-45) 執筆), 2014
- 龍谷大学東洋史研究室編『東洋史苑・大谷光瑞 50 回忌記念号』(50/51 合併号), 1998
- Esenbel, Selcuk & Kucukyalcin, Erdal & Miyuki Girardelli "Hilal ve Güneş: İstanbul'da Üç Japon- Yamada Torajirō, Itō Chūta, Ōtani Kōzui" 「新月と日の丸: 山田寅次郎・伊藤忠太・大谷光瑞イスタンブールにいた三人の日本人」展覧図録, Istanbul Research Institute, 2010
- Haz. Demirağ: The Turkish Japanese FactoryーTürk Japon Fabrikası, Bursa'ya Dokunan Tarih "1928" History Woven in Bursa, Papyrus Sahaf, Istanbul, Turkey, 2015